

JOHN STEINBECK

20世紀英米文学案内 22

John Steinbeck

スタインベック

石 一郎 編

KENKYUSHA

20 世紀英米文学案内 22

スタインベック

1967 年 8 月 20 日 初版発行

定価 480 円

編 者 石 一 郎

発行者 小 酒 井 益 蔵

印刷者 小 酒 井 益 三 郎

発行所 研究社出版株式会社

東京都新宿区神楽坂 1 の 2

電話 東京 (269) 4521-5 番

振替口座 東京 83761 番

印刷 研究社印刷

美術印刷 大平舎

製本 新栄社製本

製函 加藤製函所

(落丁・乱丁本はお取りかえします)

目 次

人と生涯 / 石 一郎	1
-------------	---

作 品

『金の杯』 / 稲澤秀夫	24
『天の牧場』 / 浜本武雄	31
『知られざる神に』 / 稲澤秀夫	37
『トーティーヤ台地』 / 百瀬文雄	44
『勝敗のわからぬ戦い』 / 浜本武雄	55
『長い谷』 / 浜本武雄	66
「菊」「逃亡」「蛇」「ジョン熊」「赤い小馬」	
『はつかねずみと人間』 / 岡本文生	79
『怒りのぶどう』 / 石 一郎	90
『コルテスの海』 / 稲澤秀夫	111
『月は沈みぬ』 / 稲澤秀夫	116

『罐詰横町』 / 岡本文生	121
『気まぐれバス』 / 稲澤秀夫	132
『真珠』 / 浜本武雄	139
『爛々と燃ゆる』 / 岡本文生	148
『エデンの東』 / 井上謙治	153
『たのしい木曜日』 / 岡本文生	171
『ピピン四世の短い治世』 / 百瀬文雄	176
『われらが不満の冬』 / 百瀬文雄	183
『チャーリーとの旅』 / 岡本文生	196
『アメリカとアメリカ人』 / 岡本文生	199
評 価 / 井上謙治	203
年表・書誌 / 石 一郎・井上謙治	巻末 1
索 引	巻末 28

人と生涯

ジョン・スタインベックの評伝としては、ピーター・リスカ(Peter Lisca)の『ジョン・スタインベックの広い世界』(*The Wide World of John Steinbeck*, 1958)がくわしい。以下この評伝を中心に、既刊の参考書を勝手に使わせてもらい、スタインベックの「人と生涯」の概略を綴ることにする。

生い立ち

ジョン・スタインベック(John Ernst Steinbeck)は、一九〇二年二月二十七日、カリフォルニア州モンテレー郡サリーナス(Salinas, Monterey County)に生まれた。父は同名のジョン・スタインベック(John Ernst Steinbeck, Sr.)母はオリヴァ・ハミルトン(Olive Hamilton)、姉二人、妹一人、三番目で長男である。

父方の祖先はグローススタインベック(Groossteinbeck)といわれ、ドイツの北ライン地方の出、祖父の代にアメリカへわたり、ニュー・ジャージー州とフロリダ州に住み、南北戦争後マサチューセッツ州へ移り、一八七四年、カリフォルニア州へきた。サリー

ナスの東北ホリスターに製粉所を立て、父は事業を受けついでが、サリーナスに定住し、郡役所の収入役を一年間とめた。

母方の祖先は北アイルランドの出、祖父の代に同じくアメリカへわたり、一八五一年、カリフォルニア州へ移った。南北戦争の終りごろサンノゼに住んだが、キング・シェーの東に農場を買って定着した。母オリヴァは結婚前、ピーチトリ、プレイトー、ビッグ・サーなど郡内各地の小学校教師をつとめ、小説『Hチンの東』(*East of Eden*)のなかでは意志のつよい女性として描かれ、長男ジョンはこの母の影響を大いに受けたものと思われる。読書好きの子供として育ち、九歳のとき、キャクストン(Caxton)版『アーサー王の死』(*Le Morte D'Arthur*)をはじめて自分の蔵書とした。「聖書」とともに長くなじんだ書物だった。長じるとつれて『罪と罰』、『ボヴァリー夫人』、『失楽園』、あるいはジョージ・エリオットやハーディの作品を愛読し、巧妙な物語の展開に魅了された。

生地サリーナスの谷からうけた影響は、とくに大きかった。早くからこの谷の自然になじみ、素材で粗野

な農場生活にとけこんだ。短編集『赤い小馬』(The Red Pony)の少年主人公ジョウディー(Jody)には少年時代の生活と環境がそっくりにじみ出ている、といつてよく、『エデンの東』の冒頭の文章は、サリーナスの谷をとりまく自然に寄せる讃歌だろう。

わたしは、子供の時分、草や人知れず咲く花につけた名前を覚えていた。カエルがいそうな場所、夏には小鳥たちが何時にめざめるかというようなこと——木立や季節の匂いがどんなかということ——人々の顔付き、歩き方、匂いまで覚えていた。匂いの記憶はすこぶる豊富だ。

とかいている。

ヘミングウェイ(Ernest Hemingway)の文学がミシガン湖畔の自然を背景にして育ったように、彼の文学もこの谷の自然を背景にして育つべきだった。彼はサリーナス高等学校にすすみ、学内機関紙『エル・ガビラン』(El Gabilan)に文章をのせたことがあるが、陸上競技やバスケットボールの運動家として知られ、上級学級の委員長にえらばれた。一九一九年、卒業後、付近の精糖工場試験所の助手にやとわれ、一九二〇年、スタンフォード大学に入った。

大学時代は出席常ならず、一九二一年の学年はまるまる休学した。農場ではたらき、ビッグ・サー(ヘンリー・ミラー Henry Miller)の居住地沿岸の道路建設工事に従い、農民や労働者の仲間入りをした。後年文名を馳せた農民小説の素材のあるものは、すでにこの時代に培^{つちか}われたものではあるまいか。下層民に対する親近感も自らめざめた。

かならずしも怠惰な学生とはいいきれず、文学作品をよくよんだ。ギリシア古典に興味を覚え、生物学入門課程をえらび、創作科に出席し、学内機関誌『スタンフォード・スペクテイター』(Stanford Spectator)に短編を二つ発表した。諷刺と象徴の性格を帯びた作品だった。

一九二五年、学位をとらずに大学を出た。作家志望の目的をいだし、貨物船にのって、ニューヨークにいった。むろん失敗だった。懷中に三ドルしか持ち合わせず、義兄をたよってマディソン・スクエア・ガーデンの建築場ではたらき、れんが運びをした。叔父の口ききで『ニューヨーク・アメリカン』(New York American)紙の通信員になったものの、記事がうまく

かけず、千篇一律な記者生活にもいや気がさした。短編を売れず、翌年早々、また貨物船にのり、はたらきながらパナマ経由で帰郷した。サリーナス、モンテレー、サン・フランシスコを転々としたのち、シエラ・ネヴァダ山中、ターホー(Tahoe)湖畔山荘の番人を引きうけた。余暇を利用して原稿をかくつもりだった。

湖畔で二冬^{ふた}おくった。巨木が倒れ、山荘の屋根をこわし、クビになって付近のマス孵化場にやとわれた。未定稿だった『緋衣の女』(A Lady in Infra-Red)を六回かき直し、『金の杯』(Cup of Gold)として完成した。一九二九年八月、先に原稿を返却したことのあるロバート・M・マックフライド社(Robert M. McBride & Co.)が引きうけて出版した。処女長編(実際には四作目といわれる)が世に出たわけである。

短編作家の登場

『金の杯』には「史実参照の海賊サー・ヘンリー・モーガン伝」(A Life of Sir Henry Morgan, Buccaneer, with Occasional References to History)の

副題がある通り、歴史的人物ヘンリー・モーガンの生涯をたどった物語である。

この作品を出版した翌月、九月二九日にはニューヨーク株式市場の株価が大暴落し、未曾有の経済恐慌はじまった。混乱と不況が手伝い、ロマンティックな海賊物語を一般に受け入れる余裕がなく、売れ行き一、五三三部という不評だった。作品そのものもリアルな描写に乏しく、観念的に筋が飛躍し、一貫したテーマをとらえにくく、習作の域を出ないといっているのだが、後年の作風の特徴がにじみ出ている点に興味がある。「ファウスト伝説」、「アーサー王伝説」、「トロイ戦争」などの故事をふまえ、象徴的に物語を発展させていく手法が見られる。

翌一九三〇年、サンノゼ生まれのキャロル・ヘニング(Carol Henning)と結婚し、モンテレー半島の突端部に近いバシフィック・グロヴ(Pacific Grove)に住んだ。父から一戸をあてがわれ、毎月二五ドルの仕送りを受けた。父にすれば息子の作家的成長をねがったことだったろうか。それにしても食うや食わずの生活で、魚を釣って自活の助けにする一方、貧乏仲間

とつき合つてすゝした。

数年来あたためていた作品「緑の女」(The Green Lady)が数社から返却され、別稿として「知られざる神に」(To an Unknown God)を出版仲介業マキンントッシュ・アンド・オーティス社(McIntosh & Otis)へ託したが、あいかわらず出版の見通しがつかなかった。その間に、短編集『天の牧場』(The Pastures of Heaven)の諸編と「不協和シンフォニー」(Dissonant Symphony)をかけた。一本にまとめるつもりだったが、後者に不満を覚えて除外し、結局「知られざる神に」よりも早く、一九三二年一〇月、『天の牧場』がB・W・プットナム社(Brewer, Warren & Putnam)から出版された。サリーナスの谷に題材を求めた最初の作品だった。

エドガー・リー・マスターズ(Edgar Lee Masters)の『スプーン・リヴァー詞華集』(Spoon River Anthology)、シャーウッド・アンダーソン(Sherwood Anderson)の『オハイオ州ワインズバーグ』(Winesburg, Ohio)の作品形式を連想させる意味では、一般の短編集と趣きを異にする。序章と終章を除く一〇章

がそれぞれ独立した物語を伝えながら、「第二章」に登場するバート・マンロー(Bert Munroe)一家がそれぞれの物語に関係し、全体が谷間の現実となる構成である。作者の特徴ともなったリリカルな文章が新鮮だったし、諷刺やユーモアがあり、マックスウェル・ガイスマー(Maxwell Geismar)は出色の作品(『危機の作家たち』二四二ページと推している。反面、エピソードふうに物語をつらねていく手法が一貫したプロットに乏しく、全体としての印象を弱め、後年のいくつかの失敗作を生む原因にもなった。

この作品はかなり好評で、印税四〇〇ドルが入った。前作はむろん、次に刊行した『知られざる神に』よりも多かった。

『知られざる神に』(To a God Unknown)をロバート・O・バルー社(Robert O. Ballou)から出版したのは、翌一九三三年。その間ロス・アンゼルスに住んだことがあるが、同年パシフィック・グロウヴに戻った。

『金の杯』に次いで作品だった『知られざる神に』は、土地に対する農民の神秘的な帰依を主題にして、

象徴の気配が濃く、エマソン流の「超絶主義」(Transcendentalism)や「大霊」(Over-Soul)の思想をみとめる評者もいる。リアリティーに乏しいのが処女作同様なが、この作者特有の風格を持った小説だった。

が、一九三三年には、短編「赤い小馬」と「大連峯」(The Great Mountains)をそれぞれ『ノース・アメリカン・レビュー』(North American Review)の一月号と一二月号に発表した。商業雑誌にのった最初の作品と記憶され、いずれもサリーナスの谷を背景にして、郷土作家の特色を発揮した作品だった。のち三部作『赤い小馬』の最初の二編として収録し、その際、短編「赤い小馬」を「贈り物」(The Gift)と改題した。

翌一九三四年「やらに」短編「殺人」(The Murder)「襲撃」(The Raid)を同誌に発表し、「殺人」がO・ヘンリー賞にえらばれ、期せずして短編作家としての存在が注目された。

ストライキ小説

第四作『トリーヤ台地』が出版されたのは、一九三五年五月のことである。短編作家としてどうやら世に出たけれども、長編出版の引きうけ手がなく、この作品にしても一一の出版社からことわられたというエピソードを持っている。ピーター・リスカによると、それは大げさで、二つの出版社がこたわったのにすぎなかった。『天の牧場』と同じく、短編の連続といった構成が目立ち、長編としてのまとまりに欠けるのが難点とされたのだが、幸運は意外なところからひらけ、コヴィチ＝フリード社(Covici-Friede)のパスカル・コヴィチ(Pascal Covici)がたまたまシカゴの書店へ寄り、店主ベン・エイブラムソン(Ben Abramson)からすすめられて『天の牧場』と『知られざる神に』をよんだのがきっかけになった。彼は感動し、さっそくマキントッシュ・アンド・オーティス社へ電話をかけて原稿をもらい、自社から刊行する運びになったのだった。

背景はモンテレー、山手方面のいわゆる「トーティ

ーヤ・フラット」に住みついている混血種族「パイサーノ」(Paisano)を描いた風変わりな小説である。作者は彼らを「自然神」と考え、「風とか空とか太陽とかの原始的な象徴」とした。彼らは友情に富み、団体行動に徹し、財産を重荷に思うユーモラスで楽天的な人間である。少なくとも作者の態度がそうなのである。

不況時代のセチがらい世相の下で、時代錯誤がかったのんびりした小説が歓迎されるかどうか、疑問がないわけではなかった。が、結果は反対に、この作品はうけたのである。ベストセラーにのし上がり、世俗的な最初の成功を作者にもたらした。浮浪者仲間を主人公にした物語が急に話題になると、地元モンテレー商業会議所があわて、観光客招致の障害になるのをおそれて作品を非難した。非難や悪評にかかわらず、作品は「カリフォルニア文学賞」(Commonwealth Club of California Gold Medal)を得、パラマウントが映画化権四千ドルを払い、貧乏作家をおどろかした。彼はハリウッドに招かれるのをきらい、妻といっしょにメキシコへ逃避旅行をしたくらいだった。人前に出たが

らないという素朴な農民の性質がある。

この旅行前に『勝敗のわからぬ戦い』(In Dubious Battle)をかき、一九三六年に出版した。この作品はまた人々をおどろかせもしたし戸惑わせもした、といっているだろう。ユーモアやペイソスのまじった象徴的な小説を期待していたからでもある。彼はストライキ小説をかいたのである。ストライキ小説をかなければならなかったところに時代の大きな変転があり、文学思潮の著しい変化もあった。その現象も見のせない。一九二九年以来の不況が深刻をきわめ、失業者がふえる一方、資本家の賃下げやクビ切りに反対して、重要産業ストライキが各地に勃発している。左翼イデオロギーに貫ぬかれるプロレタリア文学が発生したのもこの時期のことで、マイケル・ゴールド(Michael Gold)の『金のないユダヤ人』(Jews Without Money, 1930)が代表作として記憶される。あるふは貧困農民をかいいてベストセラーになったアースキン・ールドウェル(Erskine Caldwell)の『タバコ・ロード』(Tobacco Road, 1932)、シカゴの下層社会を題材にしたジェイムズ・ファレル(James T. Farrell)の

『スタッズ・ロニガン』(Studs Lonigan, 1932-5)など、社会性と現実性のつよい作品が出た。そして、カリフォルニア州フレズノ付近に勃発した農場労働者のストライキをスタインベックは親しく見た。労働争議のヴェテラン、トム・コリンズ(Tom Collins)に会い、素材を得て作品が完成したのだとJ・H・ジャクソン(Joseph H. Jackson)がヘリテージ版『怒りのぶどう』(The Grapes of Wrath, The Heritage Press, 1940)の序文で述べている。

しかし、作者は共産主義者ではなく、作品そのものもむしろ共産イデオロギーに貫かれているわけではない。皮肉なのは、政治的プロパガンダに終始した流行の「プロ小説」がすべて忘れられたあと、今日この作品が作者の名声とともに、不況時代の記憶すべき作品に数えられていることである。アンドレ・ジイドが「共産主義の心理」をもっともよく描いた作品」とほめた。題名をミルトンの『失樂園』から引き、不屈不撓の意志を持つ「悪魔」をストライキ指導者ジム・ノーラン(Jim Nolan)になぞらえ、「天上の戦い」の悲壮が地上の闘争に反映しているとする構想である。ジム

は人間の罪障を一身に引きうけた形で、最後に倒れる。それはまたキリスト的犠牲者の一人を暗示し、彼はすでに「官憲が仲間を一人殺すごとに一〇人のあたらしい仲間がおれたちの側につき、国中の同じ立場にいる連中が全部たたかうことになる」と予言している(モダン・ライブラリー版、三二二ページ参照)。

全プロレタリアの団結と勝利を意味する言葉では全くなく、一つの種族のような「集団」の意志と力を信じての表現なのだ。この「集団人」あるいは「共同体」の現実を描こうとしたところにスタインベック文学の大きな醗酵がある。そうとするなら、左翼イデオロギーの不足や欠除を批判してもはやはいまらず、彼の態度はより素朴でより人間的であった。

最初の成功作品

一般にスタインベックの文学に重要な影響を及ぼしたものとして、エドワード・F・リケッツ(Edward F. Ricketts)との親交が考えられる。リケッツはモンテレーの「太平洋生物実験所」(Pacific Biological La-

boratories, Inc.) の所長で経営者だ。一九三〇年、同地の歯医者で出会い、以来親交がはじまり、一九四八年、リケッツが交通事故で不慮の死を遂げるまでつづいた。リケッツが専門にしている海洋生物の観察と知識がスタインベックの人生観や宇宙観に浸透し、生命の神秘的な一側面をすべて生物学的観点から帰納する傾向が生じ、それを彼の「生物学的態度」として批評家が指摘する。原始動物の本能と力を持つ生物群としての人間がいるわけで、いわゆる「集団人」と呼ばれる「共同体」である。

『勝敗のわからぬ戦い』の中で、医師バートン(Doc Burton)が説明する。

「集団人(group-men)は単一の人間の集まりでは全然なくて、それがあたらしい一個の個人であるように思える。集団の中の人間はもはや一人の人間じゃない。一つの組織体の中の単一細胞で、その細胞がその人間に似ていないのは、人間の細胞がその人に似ていないのと同じことだ」(モダン・ライブラリー版、一四四―五ページ)

“...they [=group-men] seem to me to be a new individual, not at all like single men. A man in a

group isn't himself at all, he's a cell in an organism that isn't like him any more than the cells in your body are like you.”

人間は個人として存在する自由と権利を持つが、たまたま共同体のなかにあつた場合には、その「集団人」の意志と力に従わなければならない。そして個人は「集団人」そのものとなつて流動し、たまた、殺戮を行なう。「組織」の威力には、原始動物群の本能に近いものがある。その実態を具象化したような小説をかいたのでは、左翼陣営をよるこぼすはずもなかったのだが、作品そのものは、『トーティーヤ台地』と同じく、「カリフォルニア文学賞」を得た。

この作品を発表した一九三六年はかなり活動的な年で、サンノゼの南西部ロス・ガトス(Los Gatos)に転居した。五月に父を失った。短編二つを小冊子として刊行した。一つは『天の牧場』の「第六話」ジュニアス・モルトビー(Junius Malby)の挿話で、『世に法外な』となし、『Nothing So Monstrous』を題名とした。R・L・ステイヴンソンの『青年男女のたゆみ』(Virginibus Puerisque, II)の中の文句「世に自

分で信じられないような法外なものはない」(There is nothing so monstrous but we can believe it of ourselves) から採った。他の一つは『聖処女ケイティ』(Saint Katy the Virgin) 三年⁽¹⁾し発表誌がなく、コヴィチ・フリード社から出した。

九月にサリーナスとベイカーズフィールド(Bakersfield) 付近の移住労働者キャンプを訪ね、悲惨な生活についてのルポルターージュ「カリフォルニアの勝敗のわからぬ戦い」(Dubious Battle in California) を『ネイション』(Nation) 誌九月一二日号に執筆、「収穫期のジプシー」(The Harvest Gypsies) を『サン・フランシスコ・ニョーズ』(San Francisco News) 紙に、一〇月五日から七回連載した。この報告記事は、『彼らの血縁はじょう』(Their Blood is Strong) と改題し、一九三八年、カリフォルニア州サイモン・J・ルービン協会(Simon J. Lubin Society) からパンフレットで出版した。

執筆中だった『はつかねずみと人間』の原稿を、子犬のトウビー(Toby) にかみやぶられる出来事などがあつたものの、かき直して推敲を加え、九月に完成し

た。この『はつかねずみと人間』(Of Mice and Men) を一九三七年二月に出版し、たちまちベストセラーになって七万五千部を売り、ユナイテッド・アーティスト社から映画化の申し込みがあつた。作者の文名を確立した最初の成功作品だった。

経済的な余裕ができ、春に貨物船にのつてニューヨークに向かい、ニューヨーク滞在中、トーマス・マンと会食したが、借りものの洋服で正装しなければならず、困惑した。非社交的で、しゃべるのをめづりとも苦手としたことが彼についてしばしば伝えられる。

ニューヨークでは専ら作品の戯曲化の仕事をしたのだが、五月中旬、スウェーデンの貨物船で母方の祖先の地アイルランドに至り、スウェーデン、ソ連を歴訪し、八月初旬、やはり貨物船にのつて帰国した。ペンシルヴェニア州にある劇作家ジョージ・コフマン(George Kaufman) の農園にしばらく滞在し、戯曲化の仕事をつづけ、コフマンの助言を得て完成した。戯曲は一月二三日、ニューヨークのミュージック・ボックス劇場で初日公演、好評を博し、ロングランを記録した。「ニューヨーク劇評家サークル賞」(The

New York Drama Critics' Circle Award)を得た。

戯曲上演は直接作者に関係がなく、戯曲執筆を終えるとデトロイトへ出て自動車を購入し、シカゴへ走りオクラホマ州へ入った。国道六六号線を西進する移動労働者、いわゆる「オーキー」(Okie)の群れに加わり、カリフォルニア州に至った。また州内では彼らのキャンプを訪れ、詳細なメモをしたためた。大作『怒りのぶどう』の構想を得て一部執筆に着手した。

この年には三部作『赤い小馬』を限定出版し、翌一九三八年には短編集『長谷』(The Long Valley)をヴァイキング社(Viking Press)から出した。D・H・ロレンス(D. H. Lawrence)を思わせるセックス問題を取り扱い、心理手法にすぐれた「菊」(The Chrysanthemums)をはじめ佳品が多く、短編作家の力量を十分に示した短編集として忘れることができない。

記録的なベストセラー

大作『怒りのぶどう』が出版されたのは、一九三九年四月で、実際に脱稿したのは前年の終りだった。は

じめ「レティスバーク事件」(L'Affaire Lettuceberg)の仮題で、前年の六月までに六万語の原稿をかきあげたが不満を覚えてかき直し、全力を傾けた結果、執筆を終わると極度の疲労におそわれ、しばらくねたまま、医者からは執筆も読書も当分禁止をいわれた。

中西部をおそった大砂嵐らし、旱魃^{かんばつ}と農業機械化に追い立てられる貧窮農民、国道六六号線を西進するおんぼろ自動車の集団、路傍の生活、カリフォルニアでの弾圧と抗争と生存への意志、「集団人」を生き生きと描く。幕切れの殺人、豪雨、そして洪水。題材が多彩でアクションに満ち、すばらしい効果を生んだ。「中間章」では社会的・歴史的・経済的前後関係を明らかにする記録文学ふうの手法を意図し、物語と有機的に組み合わせる特異な構成を採った。J・H・ジャクソンによると、大砂嵐らしの記録映画「平原を破壊した鋤」^{すき}(The Plow that Broke the Plains)「川」(The River)の製作者D・ロレンツ(Pare Lorentz)の製作体験をただし、また移住労働者を主題にした彼のラジオ・ドラマ「この人を見よ」(Ecce Homo)の

録音をきき、重要な暗示を得たといわれる。下層社会の俗語を徹底的に取り入れ、「出エジプト記」(Exodus)の故事をふまえ、読者の理解に直截にくいこむさまどまな要素をそなえた意欲的な作品だった。異常な売れ行きを示し、一九三六年に出たミッチェル (Margaret Mitchell) の『風と共に去りぬ』(Gone with the Wind)には及ばなかった(同書は半年間に約一〇〇万部出た)けれど、年内の総出版部数約四三万部、一九三〇年代の終りの記録的なベストセラーになって反響も大きく、ストウ夫人 (Harriet B. Stowe) の『アンクル・トムズ・ケビン』(Uncle Tom's Cabin)にたとえられた。

文学的価値よりもドキュメントの異常さが人々の興味を煽り、「小説」と「事実」を取りちがえられたのは皮肉だが、そのためかえって話題を呼んだこととはたしかだ。「現実暴露」的内容が問題になったのである。キャンザス・ステイター(ミズーリ州)、東セント・ルイス、カーン(Kenn)郡(カリフォルニア州)で禁書になり、東セント・ルイスの図書館では焚書にされた。事実が歪曲され、不正確で野卑で、左翼的プロパガンダにすぎないというのが非難の主な理由だった。物語の発端の地

オクラホマ州では非難反論を新聞が報道し、ラジオや学校で討論会がひらかれ、同州選出議員がわざわざ国会で弾劾演説を行ない、商業会議所は映画化(フォックス社)に抗議した。製作者ザナック (Darry Zanuck) はわざわざ現地に調査員を派遣し、事実がさらに悲惨なおどろいた。カリフォルニア州から事実相違を示す二つの反論パンフレットが出た。

しかし、ヨーロッパの各国語に訳され、ソ連でも人気があり記録的なベストセラーになった(J・W・タルトン「ロシアにおけるスタインベック——称賛と非難の文法」『近代小説研究』一一巻一号)。ナチスがバリを占領した際「アメリカの現実暴露」を目的とする宣伝に使うため、作者をユダヤ人と決めつけ、フランス語訳をこころみようとしたが、アメリカ軍のノルマンディー進攻作戦に阻害されて果たさなかった。フランス語訳が出たのは戦後(一九四七年)で、ベストセラーになった。映画化権七万五千ドルを得、映画は翌一九四〇年一月、封切り上映され、社会抗議の映画として好評だった。一九四〇年に、ピューリッツァー賞を、また一九三九年度アメリカ・ブックセラーズ賞を授与され、さらに